聖母マリアの巡礼地ルルドと天草の模造ルルド群

The Sanctuary of the Immaculate Conception of Lourdes and the Lourdes Grottoes in Amakusa

関根　浩子
Hiroko SEKINE

崇城大学芸術学部美術学科教授
Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

はじめに

ルルドは、ピレネー山脈の麓のポー川上流の標高420メートルの谷間に位置する人口約１万５千６百人の小都市（オート・ピレネー県（Hautes-Pyrénées）に属する）にすぎないが、百年以上も前から多くの巡礼者を集め、現在も毎年５百万人もの巡礼者を集め続ける世界的なマリア崇敬の聖地である。

ルルドがこのようなフランス最大の巡礼地となったのは、貧しい少女に無原罪の御宿りが出現したからだけではなかった。聖母の出現ということだけなら、時代によって出現の頻度は異なるものの、すでに５世紀頃から度々生じており、とりわけ珍しいことではない。しかし、19世紀は他の時代に比べて聖母出現の頻度が高かった世紀であり、すでにルルドよりも前に聖母の出現はパリで２回報告されている他、アルプス山中のラ・サレットやその他のヨーロッパ各地でも報告されている。とはいえ、こうした聖母出現の地は、たちまち一大巡礼地にはなっても、時間の経過とともに訪れる者が少なくなる場合が多い。ルルドがそうした多くの聖母出現の地と違って現在も膨大な巡礼者を集めているのは、何といってもマリアの指示に従って少女が掘った場所から湧き出た泉と、その聖水が傷病者に齎し続けている奇跡的な治癒が魅力的であるからに他ならない。

報告者は、サクロ・モンテ（聖山）群に類する代用巡礼施設の日本における有無を調査するなかで、サクロ・モンテに類するような大規模な施設はないものの、日本の各地、とりわけ九州の長崎に、ルルドの御出現の洞窟部分を模造した多様な洞窟模型群が存在しているのに気付いた。また、すでにイタリアでの過去のサクロ・モンテ群の調査時にも、ドモドッソラの聖山の敷地内に、当時はそれと同定できなかったものの、聖山自体の主題とはまったく無関係のルルドの洞窟模型を見出しているので、イタリアにも数多くの模造ルルドが存在すると推測される。さらに、調査・研究を進め

る中で、世界各地に模造ルルドが建造されていることも次第にわかってきた。こうした模造ルルド、ないしは洞窟模型は、サクロ・モンテが聖地エルサレムの代用巡礼施設として出発したことを考えれば、聖地ルルドの代用巡礼模型と考えることもできる。

本報告は、世界各地の模造ルルドを紹介する論考ではなく、数年来の調査のごく一端を紹介する調査ノートである。ここでは、ルルドの歴史や聖地としての発展、御出現の洞窟やマリアの特徴等について略述した後、調査中の九州の模造ルルド群のうち、下天草の３ヶ所に存在するものだけを、聞き取り調査を基に紹介するに留める。

Ⅰ．聖母マリアの巡礼地ルルド

Ⅰ-1. 1858年以前のルルド

ルルドは、1858年までは、外部から訪れる人も殆どいない人口わずか４千人ほどの小さな町であった。しかし、町そのものの歴史は古く、城砦を建設した古代ローマ人の時代にまで遡る。ルルドは、まさにこの要塞化された岩壁の周囲に次第に発展した居住地域を起源とする町であった。

ルルドという町の名称は、伝承によれば、カール大帝のスペイン遠征に関係している。その頃ルルド城はポワティエでの戦いに敗れてサラセン人に占領されていたが、その城をカール大帝が778年に包囲して兵糧攻めにした時のことである。食料が尽きてサラセン軍が降伏せざるを得なくなった時、１羽の鷲が突然現れて指揮官のミラ（Mirat）の足元に巨大なサケを落とした。そこで策略家のミラは、その魚をカール大帝に送り、城内にまだ食糧があると思いこませようとした。しかし、危うく計にかかって大帝が城の包囲を解こうとした時、大帝の側にいたル・ピュイの町の司教が、サケの落下を非常に悪い予兆として天の元后に降伏するようミラを説得したため、ミラは説得に応じて城を引き渡し、自身の所領をピュイの聖母の荘園として寄進することにした。さらにミラはキリスト教への回心を決意し、ロル（Lorus）、もしくはロルダ（Lorda）という霊名で洗礼を受け、その霊名が町の名前となり、時代を経てルルドに変化したというものである。

この伝承の真偽は別にして、いずれにしても９世紀にはルルドを含むビゴールの地[(1)]は伯爵領となり、領主はルルド城に居を定めた。そしてフランス革命までは、ルルドはこのビゴール地方の領主によって寄進されてル・ピュイの聖母に納税していた。続いてフランス革命後は、この町には、タルブ（Tarbes）司教区に属する主席司祭管区としてオート・ピレネー小郡の郡庁が置かれた。

Ⅰ-2. 無原罪の御宿りの出現と以後の聖地としての発展

上述の伝承によれば、この町の聖母マリアへの信奉は、すでに８世紀末頃から根付いていたと言えるが、ルルドの世界的な名声は、実際には1858年２月11日に、当時13歳か14歳であった粉挽き小屋の娘ベルナデット・スビルー（Bernadette Souvirou）の前にマリアが降臨したことに起因している。

ベルナデットは、妹たちと薪を拾いに出かけた際に、マッサビエル（Massabielle）

の洞窟の上方に若くて美しい女性の姿を目にしたのである。そして、その女性の指示に従って洞窟を再訪する彼女の前に、女性は以後、計18回（７月16日まで）姿を現し続けた。９回目の出現に当たる２月25日には、女性の命ずるままにベルナデットが洞窟の奥の湿った地面を掘ると、後に不治の病を癒す奇跡の泉としてルルドの名を広く知らしめることになる聖水が湧き出すに至った。続いて３月２日の13回目の出現時には、女性は、そこに礼拝堂を建てるよう司祭らに伝えることをベルナデットに命じ、さらに16回目（３月25日）の出現時には自分が「無原罪の御宿り」、すなわち聖母マリアであることを初めて明かしたとされる。

この間、ベルナデットの幻視体験にあやかろうと彼女に同行する人々は日増しに増加していった。こうした事態を受けて、同年２月21日以降ベルナデットは度重なる審問や医学的検査を受けることになったが、矛盾なしに真摯な証言を繰り返す彼女は、次第に周囲の信頼を得ていった。さらに７月28日には、タルブ司教ローランス（Bertrand-Sévére Laurence，1790～1870）の主導によってルルド調査委員会が発足し、彼女の審問を継続する一方で、洞窟の調査や聖水によって回復した病人の検診等が開始された。そして諸報告を見るうちに確信を得た司教は、1862年１月18日、ついにルルドの幻視の真正性を宣言する教書を発令した。これによってルルドは聖地として新たな出発をすることになったのである。

出現の真正性が認められたルルドでは、1864年に洞窟での聖母像除幕式を祝って最初の公式巡礼が行われ、次いで1866年にもクリプタの聖別式時に２回目の巡礼が行われた。また、1867年にルルドーバイヨンヌ間、翌1868年にルルドートゥールーズ間に鉄道が開通すると、専用列車を仕立てての巡礼も開始された。さらに翌1869年には、信徒でジャーナリストのラセール（Henri Lasserre，1828～1900）が『ルルドの聖母』（*Notre-Dame de Lourdes*）を著わしてそれがベストセラーとなったり、その後も出現に好意的なカトリックの著述家たち、例えば歴史家で聖書註釈学者のローランタン神父（René Laurentin，1917～）が全７巻の『ルルドー真実の記録』（*Lourdes： documents authentiques*，1957～66）などを発表したりした他、エミール・ゾラなどの著名な小説家たちもルルドの出来事を文学の題材として取り上げたりしたことで、ルルドの名は世界中に知られることになった。また、ダルゾン神父（Emmanuel d'Arzon，1810～80）が1845年に創設した、巡礼をカトリックの未来にとって重要な要素とみなす聖母被昇天修道会が、会報として1873年に『巡礼者（*Le Pèlerin*）』誌を創刊してジャーナリズムを効果的に利用したことも、ルルド巡礼の発展に大きく貢献した。このようにしてルルド詣では増加の一途を辿ることになったのである。

Ⅰ-3. 世界的宗教都市へ向けての町の整備

霊水が湧き出る町としての名声が高まるにつれて、膨大な巡礼を迎え入れ、その要求に応えるために、ルルドの町ではさまざまな整備が行われた。まず、聖都の形を整えるためにバシリカから着工され、1863年にクリプタが建立（1866年聖別）されたの

に続いて、1872年には「無原罪の御宿り聖堂（上部バシリカ）」も完成（1876年聖別）された。1883年には「ロザリオのバシリカ」の礎石が置かれ、1899年に落成（1901年聖別）された。次いで1912年には無原罪の御宿り聖堂の南側にあるエスペリューグ山を利用した十字架の道行きが開設された。さらに1958年には、膨大な巡礼者の収容を可能とする「ピウス10世地下バシリカ」が、ロンカリ枢機卿（後の教皇ヨアンネス23世）によって聖別された。2008年には、上述の十字架の道行きに加え、平坦な草地の上に傷病者用の十字架の道行きも開設された。他方、傷病者の受け入れに関しては、1874年に苦しみの聖母病院が設立され、また、すでに1862年に整備されていた水浴場は、巡礼の増加とともに拡張・整備が繰り返された。さらに、1880年以降には、救いの聖母慈善会等の介護・看護士協会が相次いで設立され、ルルド・ノートルダム慈善大信徒会（1885年創立）の統轄のもとに、ボランティアによる障害者のサポート活動が行われている。

Ⅱ．模造元のマッサビエルの洞窟と出現時の聖母マリアの姿

Ⅱ-1. 現在の洞窟の外観と設置された大理石の無原罪の御宿りの像

以上のようにルルドでは、世界的な一大聖都としての設備建設が次々と進められてきたが、模造ルルド群は、既述のように、この聖都の洞窟部分だけを模造したものにすぎない。そこで以下では、模造元の洞窟に絞ってその特徴を概観したい。

ベルナデットにマリアが降臨したマッサビエルの洞窟のマッサビエル（Massabielle）とは、「古い岩」を意味するビゴール語のマッセヴィエーユ（Massevielle）に由来している。この岩は、蔦がからまる高さ約27メートルの岩塊である。洞窟内には相接する不規則な開口部が三つあり、最大のものは奥行き８メートル、幅７メートル、高さ５メートルに達している（図４、５）。

現在見られるような洞窟は、洞窟内を清掃し、洞窟内の地面を数メートル低くした後で、地面に大理石板を敷き、その中央に祭壇を置いて1955年に完成された。洞窟の前方に置かれている巨大な燭台では、絶えず蝋燭に火が灯され続けて、ルルドを訪れた巡礼者の信仰を証している。また、洞窟内の左方には、地面から湧き出て多くの奇跡を齎した霊水の水源（図６）があるが、その水源には、上に透明な厚いガラス板が被せられ、イルミネーションが施されている。洞窟の前方にはかつてはガヴ・ドゥ・ポー川と分かれて洞窟の前を通りサヴィの粉挽き小屋へ流れ込む、ベルナデットも渡った浅い水路があったが、巡礼者に祈りの場を提供するために人工的に埋め立てられた。また、ガヴ川自体も同様に約30メートル北に移された。

マリアがベルナデットに出現したのは、既述の高さ約27メートルの岩塊の右上方の楕円形の窪みにおいてであった。そこには御出現後、信徒たちが持って来たマリア像が多数並べられていた。しかし、ルルドの出来事に対してとても熱心であったリヨンに住む独身の姉妹が、そうした御像の代わ

りに、カッラーラ産大理石で出来る限り御出現のマリアの姿に近い等身大の御像を造らせてそれを設置したいと考え、ルルド司教の同意を得て、1863年に、当時リヨンの美術学校講師をしていた彫刻家ジョセフ・ファビッシュ（Joseph Hugues Fabisch, 1812～86）と７千フラン（その他諸雑費も負担）で契約し、ベルナデットの語る通りに作るよう依頼した。ファビッシュは、リヨンの教区公認の彫刻家、美術アカデミー会員でもあり、同市のノートル・ダム・ドゥ・フルビエール大聖堂の鐘塔上で今も金色に輝いている聖母像（1852年）や、同市の美術館に収蔵されているロマン主義的な大理石の≪ベアトリーチェ≫像（1855年）などを制作した才能ある彫刻家であった。

こうして1864年には、信徒たちが置いたマリア像に代えてファビッシュの手になる御像（図７）が窪みに設置され、聖別された。そして像の足元には、16回目の出現時にマリアがベルナデットに土地の方言（ビゴール語）で初めて素性を明かした時の、「ケ・ソイ・エラ・インマクラダ・カンセプシウ（QUE SOY ERA IMMACULADA CONCEPCIOU）」（「私は無原罪の御宿りである」の意）という言葉も刻まれた。しかし、制作に着手するに先立ってファビッシュは、出現時のマリアの背の高さや衣装やしぐさについてベルナデットに何度も質問したとされるにも拘わらず、完成した御像について出現したマリアとの相似性を問われたベルナデットは、とても見事な像ではあるが、両者の間には天と地ほどの違いがあると答えたという。

Ⅱ-2. ベルナデット自身が語った無原罪の御宿りの姿

それでは、ベルナデットが目にした無原罪の御宿りや洞窟は視覚的にはどのような姿や様子をしていたのであろうか。本ノートでは、分析は行わず、今後の考察のために、主にローランタンの著書『ベルナデッタ』(2)に記されているベルナデット自身の言葉や証言を紹介して特徴だけを整理しておく。なお、ここでは「親切であった」とか、「とても優しいきれいな声」であったというような、性情や聴覚的な特徴については触れない（以下、下線は稿者による）。

出現したマリアやその時の洞窟や周辺の様子に関する情報は、まず、初めての御出現後にベルナデットが語った言葉から得られる。彼女によれば、薪を拾うためにマッサビエルの前を流れる水路を渡ろうと彼女が靴下を脱ぎかけていた時、風のような音が２度聞こえ、続いて、地面から３メートルほどの高さにまでのび、洞窟の右側の暗い岩の窪みの周りを伝っていた野生のバラの枝が動き、その岩の窪みには柔らかい光が射して、その光の中に白い服を着て人を迎えるときのように両手を開いたとても美しい若い女性の微笑みが見えたという。そして、一種の恐怖に襲われて身動きできず、ポケットのロザリオに触れて十字架のしるしをしようと努力する彼女の前で、その女性は十字架のしるしをし、続いて、恐れの気持ちが消えて彼女がロザリオを唱え始めると、女性も唇は動かさずに自身が持っていたロザリオの珠をつま繰ったという。

次に、マリアに関してベルナデットが語ったのは、６回目の出現後にルルドの警

察署長が誘導尋問に近い取り調べを行った時である。聖母マリアを見たのか否かとの署長の問いに、彼女は、聖母マリアを見たとは言っておらず[3]、何か白いもので小さなお嬢さんの形をしたものを見たと答えた。また、女性の着衣については、白いワンピースを着て、帯は青く、頭には白いベールをかぶり、両方の足のところに黄色いバラがあり、そのバラの色はロザリオの鎖の色と同じ色であったが、服とバラが隠していて足の指しか見えず、髪の毛も少ししか見えなかったと答えた。さらに、署長がルルドの有名な美女たちと女性の美の優劣を問うと、彼女たちとは問題にならないほどきれいで、年ごろは若いと答えている。

続いて、主任司祭から女性に名前を尋ねるよう再三指示されていたベルナデットは、16回目の出現時に、今日こそは返事をもらおうと心に決め、勇気を出して丁寧に微笑み続ける女性に質問を繰り返した。すると女性は４度目の質問に対してようやく、微笑むことをやめて、今まで組んでいた両手を離し、地面の方へその手をさし伸ばしたかと思うと、再び胸の高さのあたりで手を合わせ、天の方へ目を上げて、既述のようにビゴール地方の方言で「ケ・ソイ・エラ・インマクラダ・カンセプシウ」と答えたという。

さらに、1860年12月７日にタルブのローランス司教と12人の委員がベルナデットに対して最後の調査を行い、マリアが後光を帯びていたか否かと尋ねた際には、彼女は、聖母は柔らかい光に包まれており、その光は御出現の前から出ていて、後まで少し残っていたと答えている。

また、1863、64年にファビッシュによる石膏像と大理石像を見せられ、それらについてマリアとの相似性を問われた際には、聖母マリアは全く無私無欲で単純そのものであり、左右対称にまっすぐ立っており、その顔は若さも微笑みも十分にあり、目は上げていたが頭は上げずに肩の上に真っすぐになっていたと答えている。そして、手はきちんと合わせられ、指も一本一本合わせられて、左右の足も離れ過ぎてはおらず、身長は1.4メートル位であったと言っている。また、服やベールについては複雑な襞はなく真っすぐに垂れていたと答えている。

その他、1874年10月には、新しく任命された自身の看護師に、出現した聖母マリアの目は青であったとも語っている。

ベルナデットが語った以上の出現時の女性や洞窟等の特徴を整理すると、ルルドのマリアと洞窟とは、少なくとも以下のような特徴を備えたものということになろう。

①ルルドの無原罪の御宿りの特徴

１回目の出現時→白い服を着て両手を開いて優しく微笑んだ後、自身のロザリオをつま繰る若い女性

６回目の出現後の尋問時→白いワンピースを着て、帯は青く、頭には白いベールをかぶり、両方の足にロザリオの鎖の色と同じ黄色いバラがあり、髪は少ししか見えず、足も指しか見えていない若くてきれいで小柄な女性

16回目の出現時→微笑むことをやめて、今まで組んでいた両手を離し、地面の方へその手をさし伸ばしたかと思うと、再び胸の高さのあたりで手を合わせ、天の方へ目を上げて「私は無原罪の御宿りである」と答

える女性
1860年の最後の調査時→柔らかい光に包まれた女性
1863、64年に石膏像と大理石像を見せられた時→目を上げてはいるが頭は上げずに肩の上に真っすぐにのせ、手も指もきちんと合わせて、左右の足もあまり開かず左右対称に真っすぐ立った、若さと微笑みを湛え、複雑な襞のないまっすぐ垂れる服やベールを身に付けた身長約1.4メートルの無私無欲な女性
1874年に看護師に物語った時→目が青い女性

②洞窟の特徴

右側に暗い岩の窪みがあり、その周りを地面から伸びた野生のバラの枝が伝っており、さらに前方に水路が流れる洞窟

Ⅲ　天草の模造ルルド

これまでルルドの歴史や聖地としての発展、並びに出現時の洞窟やマリアの特徴等について述べてきたが、次にそうしたルルドの洞窟や無原罪の御宿りに対する日本における崇敬と、その展開の天草における例について記しておきたい。

Ⅲ-1. ルルドの無原罪の御宿りと日本、並びに模造ルルドの日本への伝来

日本にルルドのマリアへの崇敬が伝わったのは1865年頃と考えられる。プティジャン神父（Bernard-Thadée Petitjean, 1829～84）とともに潜伏キリシタンのカトリック復帰に尽力したローケーニュ神父（Joseph Marie Laucaigne, 1838～85）は、ルルドがあるタルブ教区の出身で、宣教時にルルドの無原罪の御宿りについて語っていたからである。また、幕末から明治初期に及んだ浦上四番崩れの間に信徒から没収された史料中のメダイの一つが、プティジャン神父ら宣教師が信徒に与えたルルドの聖母のメダイである可能性が指摘[4]されている。ちなみに、19世紀に最初に日本へのカトリックの再布教に尽力したフォルカード神父（Theodore-Augustin Forcade, 1816～85）は、後にヌヴェール司教（在任期間：1861～73年）になった際に、ベルナデットに修道生活をすすめ、ヌヴェール愛徳修道会への入会の便宜を図っていた。

以上のように、日本におけるルルドの無原罪の御宿りに対する崇敬はすでに19世紀の第３四半期から確認されるが、日本を含めた世界各地で模造ルルドがさかんに造られるようになったのは、ローマ教皇レオ13世が1891年に２月11日をルルドの聖母マリア御出現の祝日と定め、ヴァティカン宮殿の庭に模造ルルドを造らせて以降のことである。ヴァティカンの模型に先立って、ベルギーのオオスタッカーに早くも1872年に模造ルルドが建造されてはいるが、同模型の世界各地への伝播の契機となったのは、建造させた洞窟模型の前でレオ13世が祈りを捧げたことであったと言える。

祈りを捧げるために模造ルルドを身近な場所に造るという考え方は、日本には早くもその４年後には伝えられた。長崎県五島地区の司牧を任されたペルー神父（Albert Pelu, 1848～1918）が、明治28（1895）年に井持浦聖堂の祝別式の直後に模造ルルドの建造を提案しているからである。ペルー

神父が提案したその洞窟模型は、明治32（1899）年には完成し、翌年祝別された。その後は、広島県福山市のカトリック福山教会（現存せず）や愛知県名古屋市の首税町教会（現存）、東京都文京区のカトリック関口教会などに次々に模造ルルドが建設され、現在に至っている。

Ⅲ-2. 天草のカトリック教会堂と模造ルルド

模造ルルドは、日本のなかでも九州、とりわけ長崎司教区に数多く建造されているが、福岡司教区に属する熊本県にも多くの洞窟模型が存在している。本ノートでは、実見して回った模造ルルド群のうち、建造関係者からの聞き取りが叶った下天草の三つのカトリック教会の敷地内に建造された模造ルルドについて紹介しておく。

①カトリック本渡教会と模造ルルド

ルイス・デ・アルメイダ（Luis de Almeida, 1525～83）の伝道によって、かつて天草氏領内には35の教会、河内浦、本渡の２ヶ所には司祭館もでき、本渡の教会と司祭館については、現在の殉教公園と本渡教会の墓地の近くに、1575年から、キリシタン禁止令によって破壊される1612 年まで存在していたことが知られているが、1612年以降20世紀半ばまで、本渡にカトリック教会が再建されることはなかった。その後教会は20世紀半ばには再建されたが、再建されたのには以下のような理由があった。

今から62年前、福岡司教区は福岡、熊本、佐賀の３県からなり、福岡県の北九州地区をパリ外国宣教会が、佐賀県をミラノ外国宣教会が、また熊本県を聖コロンバン会、そして福岡市や筑後地区を教区司祭やその他の宣教会、修道会がそれぞれ担当していた。そのような中で、熊本県の司牧を任されていた聖コロンバン会は、地区本部を熊本市内にある手取教会に置いて定期的に地区の集会を開いていたが、それらの集会には、天草地区の大江と崎津で司牧にあたっていた司祭たちも、船やその他の交通機関を利用して６～７時間かけて参加していたため、地区長であった F. ハンター（Francis Hunter）神父は、熊本までの中継地点となり、また、天草で一番大きな町であって宣教の足がかりにもなる本渡市に教会を建てることにした。こうして、1951年に本渡市にカトリック教会が設立され、初代主任司祭としてモラハン（James Morahan）神父（在任期間：1951～55年）が着任し、11月23日に20世紀の初代の教会堂が彼によって祝別された。その後本渡は、昭和38（1963）年には小教区となり、さらに再度赴任してきたモラハン神父（在任期間：1978～86年）によって現在の新聖堂建設が開始され、昭和59（1984）年２月12日に平田三郎司教によって祝別された。

明治以降に建設、再建された教会としては、天草では歴史の浅い本渡教会ではあるが、模造ルルドの建設は、後述する二つの教会に先んじて行われた。本渡教会の模造ルルド（図８）は、司祭としての初の赴任先として同教会に赴任したばかりのライル（Sean M. Ryle）神父（在任期間：1957～67年）が、ルルドの奇跡から百年目に当たるのを記念して創設を企図したものであった。

そしてその発案に当時の本渡市役所観光課が賛同し、「日本一のルルド洞窟模型」を造ろうと、市観光課と神父（教会）、並びに信徒が協力して建造に当たった。観光課側の中心人物は、当時の課長の金子清士氏、係長の宗像氏、また、信徒側の中心人物は元天草文化協会長の堀田善久氏や、キリシタン研究に情熱を燃やし、遺物を収集してもいたトミヤ旅館[5]の渡辺氏などであった。洞窟建造用の石材は、課長の金子氏が十万山に所有していた土地から彼らが車で運び、続いて教会の敷地の入口の左側、つまり教会堂の前庭にそれらを築山（つきやま）のように組んで洞窟とした。さらに、洞窟の前方に作られた池には、聖地ルルドから実際に持ち帰られた水が注がれ、聖母マリアとベルナデットの御像が洞窟に設けられた壁龕と池の周囲の一つの石の上にそれぞれ設置された。それら２体の御像はライル神父が注文して制作させたものであったが、注文先は不詳である。作庭費用は、自然石による模型部分は無料の石材提供と無償の労働奉仕によって建造されたものであったが、それら以外は市の観光課から支出されていたと考えられる。しかし、詳細は詳らかでない。建造期間は数ヶ月であり、昭和33（1958）年には完成されたという。

使用されている石材も作庭の規模も大きく、教会の敷地のかなりの部分を占めている本渡教会の模造ルルドの造営は、模型による観光客の誘致という当時の行政側の意図と、それによる信徒の啓発という教会（ライル神父）側の意図とが合致するという幸運の中で行われた事業であり、政教分離が厳しく言われるようになった現在では不可能な事業であったと言える。

②カトリック崎津教会と模造ルルド

旧崎津村（現河浦町崎津）には、明治６（1873）年のキリスト教解禁後程なくして御堂が建てられたが、当初の御堂については詳らかでない。具体的に知られるのは、村の中心地諏訪宮社の宮下に、フェリエ（Joseph Bernard Ferrie）神父在任期（1882～92年）の明治18（1885）年に計画され、３年後の明治21（1888）年に造り替えられた旧聖堂からである。この旧聖堂は、鐘塔も何もない公民館風の木造切妻屋根瓦葺の平屋で、間口は４間半、奥行は約６間あり、天井は蝙蝠天井で高く、内部は畳敷きであった。また、本堂の両壁面は、大江の場合と同様、色ガラスの縦長窓と横板張りとが交互に組まれた形であった。玄関は、間口６尺半弱、奥行３尺あり、本堂の前に突出していた。

崎津教会は長い間大江教会の巡回教会となっていたが、昭和２（1927）年に崎津教会の主任司祭としてハルブ[6]（Augustin Pierre Adolphe Halbout）神父（在任期間：1928～45年）が着任し、以後長期にわたって当地の司牧に当たることになった。そして、同神父の在任期間に当たる昭和８（1933）年に、明治４（1871）年まで毎年踏絵が行われたかつての庄屋屋敷跡に、その踏絵の場所が祭壇に当たるような設計で新聖堂が着工され、翌９（1934）年に献堂された（図９）。この新聖堂は、ハルブ神父が信徒の協力を得て執念で実現させたものであり、設計・施工を任されたのは、九州に和洋折衷的教会堂を数多く残した当時

の教会堂建築の第一人者、鉄川与助であった。正面の鐘塔が尖頭で、天井や窓、出入口のアーチも尖頭型が特徴のこのドイツ・ゴシック風建築は、間口が５間半、奥行が約12間あり、堂内は畳敷きとなっている。また、本体は木造であるが、正面の玄関部を含む塔屋部分、及び会堂部の第一間は鉄筋コンクリート造りになっている。建造にかかった費用は、工事費と土地の購入費を合わせ２万５千円であった。

信徒で崎津教会委員長の山下富士夫氏によれば、崎津の小規模な模造ルルド（図10）は、信徒全員で昭和49（1974）年に海側に顔を向けて設置したブロンズ製の≪岬の聖母像≫より後の、昭和50年代の早い時期に建造されたものである。長崎に発注[7]された≪岬の聖母像≫は、山下氏が単独で設置を予定していたものであったが、他の信徒からの要望を受けて、信徒全員で設置することにしたものであった。

模造ルルドも同様に山下氏が発案者であった。それは、山下氏の叔父が殺風景な教会の前庭に金魚が泳ぐ池の造営を提案したことに始まる。山下氏は、続いて、叔父の提案に対し、単なる池ではなく観光対象にもなるような模造ルルドの造営を再提案したが、これが当時の司祭であったコア（Sean Corr）神父（在任期間：1964～78年）の同意を得るところとなり、教会堂から司祭館へ至る途中の教会堂の左前方に、金魚も泳ぐ小規模な模造ルルドの建造が開始されることになったのである。

建造資金がなかったため、洞窟の造営に必要な石材は、山下氏が依頼した信徒・非信徒を含む友人たちが根引きの山中から三日かけて運んでくれたという。また、池についても、大矢野の九州真珠株式会社の従業員で、同社責任者であった津守氏の菊池市にある邸宅に池を造った経験がある３人が、人夫として１週間同社から派遣されて造ったものである。彼ら３人は、池を造る資金の寄付のかわりに津守氏が派遣してくれた従業員であった。石材間に植えられている松などの樹木や植物は、同じく九州真珠株式会社に勤務していた山本氏の兄が準備したものである。他方、組み上げた石材の上方に置かれた聖母マリア像と、下方からマリアを見上げるベルナデット像は、教会側（コア神父）が準備して設置したものであったが、どこに依頼したものであるかは不詳である。

③カトリック大江教会と模造ルルド

大江の旧聖堂は、村北部のキリシタン集落中の丘上の現在司祭館がある場所に、前述のフェリエ神父在任期（1882～92年）の明治16（1883）年に建立された。それは木造切妻屋根瓦葺平屋で、間口４間半に奥行６間位で、天井は低く蝙蝠天井ではなかったとされる。本堂両側面は色ガラスの縦長窓と横板張とが交互に組まれた形で、内部は畳敷きであった。そして、本堂の前に突出していた入母屋式屋根の玄関は、間口６尺半弱、奥行３尺で、左右開き式の横戸が付けられていた。明治25（1892）年に天草に着任したガルニエ（Frederic Louis Garnier）神父（在任期間：1892～1941年）には、それは「六角棟の異様な風景をした教会堂」[8]と映った。

旧聖堂の西側を拓いて着工された新聖堂

（図11）は、昭和８年１月に献堂された。新聖堂は、鐘塔をはじめ天井や窓、出入口のアーチに特色がある和洋折衷型のロマネスク風建築で、間口は８間、奥行は約13間ある。堂内の床は、中央通路部分が板張り、信徒席が畳敷きで、会堂全体としては簡素な造りとなっている。ガルニエ神父が極端に倹しい生活をして作った私財を投じて成就されたこの新聖堂の工事費は２万５千円（うち２万円を神父が負担）、設計並びに施工者は、１年後に崎津教会堂を手掛けることになる既述の鉄川与助であった。

ガルニエ神父の宿願であったこの白亜の聖堂の美しさをさらに引き立てている大江の模造ルルド（図12）が造営されたのは、昭和61（1986）年のことであった。それは、本渡教会と崎津教会には既に模造ルルドが建造されていたのに対し、大江教会にはまだなかったのを遺憾に思った、信徒で当時堀田建設社長であった堀田静夫氏が、大江にもルルドが欲しいと当時の司祭の H. ハンター（Hubert Hunter）神父（在任期間：1984～91年）の同意を得て建造を思い立ったことに始まる。その頃下田と福連木（ふくれぎ）で建設作業に携わっていた堀田氏は、特に下田橋の工事の際に邪魔な石が取り除かれたのを知っていた。そこで、それらの不要な石を大江の模造ルルドに活用することにして昭和60（1985）年に工事を開始した。着工に先だって堀田氏は長崎や五島の模造ルルドを見て回っており、当然それらを参考にして大江のルルドを造ったが、後年フランスのルルドの洞窟を訪れた際、オリジナルが自身が造ったものとはまったく違っているのに気付いて造り直すことを考えたが、他の信徒から現状のままでよいと言われ、結局造り替えることなく今に至っているという。

建造場所は、他に余地がなかったことと、墓地や手洗いがあって外観が悪く洞窟模型に替える方がよいと思われたこととから、教会堂の西側の現在の場所が選ばれた。石組は専門の庭師が組んだものであり、既述の二つの教会とは異なって信徒は建造には参加しなかった。また、聖母マリア像とベルナデット像は、堀田氏が長崎の中田工房（当時の経営者は中田秀和氏）[9]から自費で購入して設置したものである。洞窟模型の建造工事は、ロザリオ館から教会堂に至る遊歩道の工事の一環として行われたため、建造費は天草市と熊本県の観光協会から支出され、教会からは彫刻像の購入費を含め一切支出されることはなかったという。ちなみに、大江の模造ルルドのメンテナンスは今も引き続き堀田氏が行っている。

おわりに

以上、聖地ルルドや模造ルルドについて、今後の研究のための覚えを記したが、模造ルルドのように民間信仰的性格の強い代用的崇敬対象をいずれの学問領域で扱うべきであるのか、報告者はここ数年自問自答を繰り返してきた。美術史学や芸術学では大芸術やハイ・アートばかりが研究対象として偏重されがちであるが、夥しい数のエックス・ヴォートと同じように、こうした代用的建造･模造物群は、洋の東西を問わず、大芸術やハイ・アート以上に歴史のうねりや真実、各時代の民衆の真の声や切なる願

いをより率直、かつ素朴に語ってくれることがある。建造当時を知る方がおられるうちに一つでも多くの事実を書き留めておきたいと思うのは、報告者が、民衆的造形物から見えるそうした造形史のうねりや真実もあると信じるからに他ならない。

［註］

⑴　フランスとスペインの国境にあるピレネー山脈の麓をさす旧地方名。現在のオート・ガロンヌ県、オート・ピレネー県、ジェール県の３県に跨る地域に当たる。

⑵　R. ローランタン『ベルナデッタ』ドン・ボスコ社　2004年

⑶　ベルナデットは当初は出現した女性を聖母マリアとは言わず、「アケロー（Aquerò）」（ルルドの方言で「あれ」の意）と言い続けた。

⑷　加藤久雄「長崎のルルド巡礼」『ザビエルと歩くながさき巡礼』カトリック長崎大司教区監修　長崎文献社　2008年　148頁では、明治12（1879）年に内務省社寺局から東京国立博物館に引き継がれたメダイのうち、収蔵番号439はルルドの聖母のメダイとされている。しかし、『東京国立博物館図版目録キリシタン関係遺品編』（東京美術　昭和47年）に掲載されている収蔵番号439の表のレリーフは明らかに聖母子と複数のこどもを表しており、単独像であるルルドの無原罪の御宿りの図像とは異なっている。しかし、没収品のメダイ中に、19世紀にフランスで立て続けに起こった聖母出現に関係するラ・サレットの聖母像（２点）や、奇跡のメダイの聖母像を表に表現したメダイが数多く見出されるという事実は、ルルドのマリアを表現したメダイが同時期の日本に存在した可能性を示唆していると言えよう。

⑸　天草市商工観光課に照会したが、現在は営業しておらず、旅館名にどのような字が充てられていたかは明らかにできなかった。

⑹　原音に忠実に表記すれば「アルブ」とすべきであるが、諸資料では「ハルブ」とされているため、同定されない可能性を虞れ、後者を採用することにした。

⑺　山下氏によれば、当時長崎純心大学に勤務していた彫刻家の教員（姓名不詳）が制作した作品である。

⑻　浜名志松『天草の土となりて　ガルニエ神父の生涯』日本基督教団出版局　1987年　66頁

⑼　当時の経営者は彫刻家であり画家でもあった中田秀和氏であった。なお、大江教会の敷地内に昭和46（1971）年設置された≪ガルニエ神父の胸像≫（ブロンズ）も同氏の作品である。

［参考文献］　（註に挙げた文献は除く）

＜ルルド関係＞

D. M. Astrua, *Storia Illustrata di Lourdes*, Edizioni I.S.G., Vicenza, 1970.

“Fabisch, Joseph Hugues”, *Benezit Dictionary of Artists*, vol. 5, Éditions Gründ, Paris, 2006, p. 388.

G. Ausina, L. Prodomi, *Lourdes. The life of Bernadette – The Apparitions. The Sanctuaries*, Editions Doucet, Lourdes, 2007.

A. Bernardo, *Lourdes*, Edizioni Doucet, Lourdes, s.d..

竹下節子『奇跡の泉ルルドへ』NTT 出版株式会社　1996年

R. クリス、L. レッテンベック著　河野眞訳「ルルド　Lourdes」『ヨーロッパの巡礼地』

愛知大学叢書Ⅸ　文楫堂　平成16年　211～214頁
若月伸一「奇跡の聖なる水　ルルド」『ヨーロッパ聖母マリアの旅』東京書籍　2004年　154～167頁
アンドレ・ラヴィエ著　ヌヴェール愛徳修道会訳『ベルナデッタとロザリオ』ドン・ボスコ社　2008年（第２刷）
「ルルド　Lourdes」『新カトリック大事典Ⅳ』新カトリック大事典編纂委員会編　研究社　2009年
エリザベート・クラヴリ著　船本弘毅監修　遠藤ゆかり訳『ルルドの奇跡－聖母の出現と病気の治癒』知の再発見双書146　創元社　2010年
イアン・ブラッドリー著　中畑佐知子・中森拓也訳「第17章　ルルド」『ヨーロッパ聖地巡礼－その歴史と代表的な13の巡礼地』創元社　2012年　173～184頁
＜天草の教会と模造ルルド関係＞
カトリック福岡教区『福岡教区50年の歩み』聖母の騎士社　昭和53（1978）年
太田静六『長崎の天主堂と九州・山口の西洋館』理工図書刊　昭和57（1982）年　212～213頁
八木谷涼子編『日本の教会をたずねて』別冊太陽 No.119 Autumn 平凡社　2002年　24～27頁
鈴木　功『西海の天主堂を訪ねて』心力舎　2003年　237～246頁
濱名志松編著『五足の靴と熊本・天草』国書刊行会　2008年（第２刷）　35～70頁
カトリック福岡教区信徒使徒職協議会『カトリック福岡教区　75周年資料集』出版社名記載なし　2009年　98、104～105、119頁
天草キリシタン文化史研究会編『天草吉利支丹史跡探訪－「切支丹」殉教地巡礼めぐり』天草殉教者記念聖堂　2010年　64～76頁
長沢利明「日本のルルド」『西郊民俗212』2010年　１～13頁
本渡カトリック教会『二十五年のあゆみ　1976』出版社・出版年不詳
カトリック本渡教会「60年のあゆみ　1951年－2011年」作成年不詳（未活字化資料）

［図版出典］

図１～２、４～11：稿者撮影
図３：A. Bernardo, *Lourdes*, Edizioni Doucet, Lourdes, s.d., p.52 と D. M. Astrua, *Storia Illustrata di Lourdes*, Edizioni I.S.G., Vicenza, 1970, p.64 掲載の図版

［謝辞］

天草の模造ルルド群や関係した在任司祭に関する聞き取り調査や資料収集等に際しては、お忙しいなか、以下の方々に御教示や御協力を賜った。記して衷心よりお礼申し上げるとともに、引き続き関係諸氏の御教示や御指摘、御協力を乞う次第である。最後に、聞き取り調査箇所の文責は一切稿者にあることを付記しておく。

青木悟神父（カトリック健軍教会主任司祭）　天草市商工観光課　堀田善久　堀口静夫　牧山美好神父（カトリック大江・崎津教会主任司祭）　山下富士夫　渡辺隆義神父（本渡カトリック教会主任司祭）（敬称略、五十音順）

図１　現在のルルドのバシリカ（フランス）

図２　現在のマッサビエルの洞窟と無原罪の御宿り聖堂（洞窟の上方）、ロザリオ大聖堂（左方）

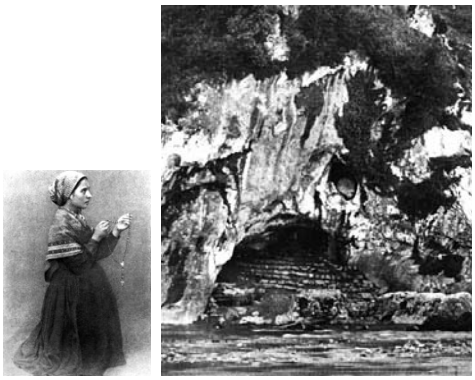

図３　左：1860年に撮影されたベルナデットの最古の写真
右：御出現（1858年）頃のマッサビエルの洞窟を撮影したとされる写真

図４　現在のマッサビエルの洞窟（上方は無原罪の御宿り聖堂）

図５　現在のマッサビエルの洞窟

図６　多くの奇跡を齎したルルドの霊水の水源

図７　聖母マリアの御出現の場所（左図中央）とそこに設置されたジョセフ・ファビッシュ制作の聖母マリア像（1864年）（右）

図８　本渡教会の模造ルルドと聖母マリア、ベルナデット像
昭和33年完成

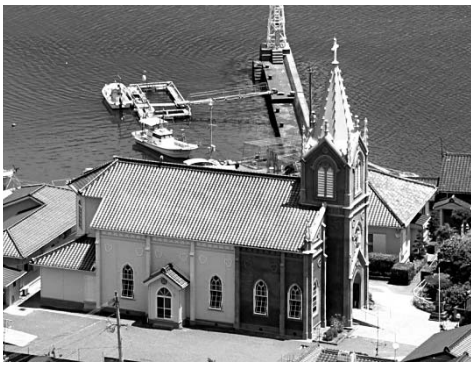

図９　現在のカトリック崎津教会外観（天草）
昭和９年　設計・施工　鉄川与助

図10　崎津教会の模造ルルドと聖母マリア、ベルナデット像
昭和50年代建造

図11　現在のカトリック大江教会外観（天草）
昭和８年　設計・施工　鉄川与助

図12　大江教会の模造ルルドと聖母マリア、ベルナデット像
昭和60年着工　同61年完成